

大山隠岐国立公園

報告者：環境省大山隠岐国立公園管理事務所 所長 中山直樹

<大山隠岐国立公園とは>

山陰地方に位置し、日本で6番目に指定された国立公園だ。鳥取県の大山・三徳山、岡山県の蒜山、島根県の隠岐諸島・出雲大社の地域を含む国立公園。面積は決して大きくはないが、多くの利用者が訪問する国立公園で、テーマに掲げているように山、草原、島嶼と多様な景観が見られるお得感がある。日本神話の舞台、山岳信仰の地、自然がミックスになった人文景観というのが特徴になっている。周辺には世界ジオパーク山陰海岸、ラムサール条約湿地「中海・宍道湖」、世界遺産の石見銀山など自然・文化の魅力的なところがある。周辺地域と一体的に魅力を提供しているのが特徴。

<大山隠岐国立公園と国外からのアクセス>

アクセスに関しては、海外、特にアジア地域からクルーズ船、飛行機で米子空港に入る（ルートが）増えている。国際空港、国際フェリーターミナルから30分で国立公園に着くことができるので、アクセスは決して悪くはない。

<山陰のインバウンド対応>

鳥取島根では広域連携DMO山陰インバウンド機構が各種インバウンド対応を行っていて、そこと密に連携をしている。広域観光周遊ルート、2つのモデルコースの1つに国立公園を位置づけてもらって国内外の商談で国立公園についても商品としてプロモーションを実施してもらっている。

<国立公園満喫プロジェクトで目指す姿>

当地域で目指す姿として、ステップアッププログラム事項を紹介しようと思う。

大山山頂の保全活動など先進的なオーバーユーズ対策で知られている国立公園として、本来の魅力である自然が守られること、ルールやマナーが徹底されるということについてインバウンド対応の環境に加えてトップに掲げているのが特長だ。多様な団体との連携にも力を入れている。全体協議会の他に県別部会、エリア別部会を開催する他に運輸局等と各種連携事業を行っている。周辺地域と一体的に魅力を提供することがとても重要な地域になっているので、今年10月にはこのプログラムを改定して1つの柱として周辺地域と連携した魅力の提供という項目を加えた。具体的な個別取り組みとして、広域的なトレイルルートの設定等の取り組みを加えた。大山隠岐国立公園では環境省と3つの県が中心となって様々な事業を行っているが、時間が限られているので3つの取り組みを紹介しようと思う。

<利用者負担による保全の仕組みづくり①>

涌井先生から保全と利用の高循環を進めることが重要だという話があったが、大山隠岐国立公園でもその取り組みに力を入れている。三瓶山は草原景観が評価されて国立公園になったが、その維持のために伐採した木材を薪にしたもの、地元のハンバーガーの売り上げの一部を草原景観の維持活動に寄付するという循環のプログラムを今年の5月に立ち上げた。

<利用者負担による保全の仕組みづくり②>

来年大山寺にリニューアルされる予定の大山ナショナル・パークセンターでは休憩機能、登山基地機能を強化し、ロッカー、シャワーの利用料金を施設の管理運営に反映する仕組みを構築している。

<利用者負担による保全の仕組みづくり③>

世界最大級の両生類オオサンショウウオの主要の生息地になっている里山において、両生類研究者等の関係者と協力して、その保全活動に貢献する、サステイナブルツーリズムを目指したようなツアープログラムをキラーコンテンツとして育成している。

<引き算の景観改善①・②>

廃屋撤去、使っていない施設の活用等の引き算の景観改善について紹介したいと思う。大山寺では大山町が廃屋を2箇所撤去し、カフェや物販機能を有する（仮称）山の駅という施設を設置している。同じ地区では鳥取県が電柱の地中化、高さ変更について検討を進めている。廃業となっていた施設を、交付金を用いて改修し、観光案内、カフェを有する施設を今年7月にオープンした。

<キャンプ場の改革①②>

キャンプ場のリニューアルや活用に関する取り組みを紹介しようと思う。大山蒜山エリアでは4箇所の環境省の直轄の野営場があり、その再整備を目指してあらたなキャンプニーズ、周辺との一体的な利用、民間事業者によるノーハウ等を踏まえた整備を目指して検討を進めている。三瓶山ではグランピングのパッケージ化、プログラム化に向けて検討が進められている。ハードと連動してソフトの取り組みにも力を入れている。スノーピーク様の受託事業により、蒜山においてインバウンド・アウトドア関係有識者、地域の行政観光関係者を集めたモニタリングキャンプというものを開催し、キャンプ場利用だけではなく周辺のサイクリング利用、施設訪問、地域の食材を用いた料理を組み合わせたプログラムをみなさまに体験していただき、この地域、国立公園の魅力の発信の方向、キャンプ場の活用について意見交換をした。今後のこの地域の魅力向上に向けた有益な意見交換ができた。

<アクセス環境の改善>

二次交通対策、アクセス対策が重要な課題になっている。この地域でも今年から日御碕地域でガイド付きの夕日鑑賞バスの運行をしたり、大山の定額タクシーなどの取り組みを進めている。レンタカー以外の交通機関を利用する人を増やすためにはさらに二次交通の充実化が喫緊の課題となっている。

<プロモーション：口コミ評価の拡大>

プロモーションだが、山陰地域はリピーターの個人客が多いので、そういった人たちに対して口コミ評価の拡大を目指している。域内在住の外国人に対する国立公園の写真教室だったり写真展の開催を進めている。国立公園を紹介するイベント、国立公園内外で開催している。日本在住外国人による Facebook、Instagram 等の SNS を通した国立公園の魅力発信を進めるために大山隠岐国立公園国際パークサポータープログラムというものを立ち上げた。英字新聞のライター等を含む 13 カ国 19 人が登録をしてくれ、国外に向けて情報発信を進めているところだ。

<プロモーション：秋季ファムトリップ開催>

国立公園のコンテンツの磨き上げ、プロモーションを目指してファムトリップも開催している。3 つの県の国立公園をまたぐ大山パークウェイというルートと周辺地域を対象にしてファムトリップを開催した。大変高い評価をもらい、早速プロモーションにも貢献されている。最後になるが、大山では来年山の日全国大会が開催されるとともに大山開山 1300 年祭を迎える。大山隠岐国立公園は大山、三徳山、日御碕等の日本遺産の登録地にもなっている。こういった他のイベント、事業と連携をして効率的、効果的にプロモーションを進めていきたいと思っている。